

Title	鎌倉期における『文鳳抄』『擲金抄』の享受
Sub Title	The enjoyment of "Bunpôshô" "Tekkinnsyô" in Kamakura period
Author	大木, 美乃(Ôki, Yoshino)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.23 (358)- 40 (341)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鎌倉期における『文鳳抄』『擲金抄』の享受

大木 美乃

一、はじめに

平安中期に句題詩（漢字五文字からなる詩題をもつ詩）の構成方法が確立されたことは、多くの貴族たちが詩を詠むことを容易にした。詩宴が頻繁に催される中で、作詩の指南書の編纂が求められるようになった。そして平安後期には、中国の類書（徐堅撰『初学記』等）に倣った本朝の類書編纂の動きが高まっていく。

続く鎌倉期においても詩宴は頻繁に催され、多くの対句語彙集や秀句抄が成立した。しかし、その殆どは佚書である。その為、現存する『文鳳抄』や『擲金抄』は、当時の対句語彙集の姿を窺うことの出来る貴重な資料だと言える。本稿では、こうした対句語彙集の利用方法について検討し、実際に二書が利用されたと考えられる詩懷紙の内容を考察していきたい。

二、『文鳳抄』、『擲金抄』について

最初に、『文鳳抄』、『擲金抄』について説明しておきたい。

『文鳳抄』は、菅原為長（一一五八～一二四六）が撰じた対句語彙集である。成立時期については、山崎誠氏が嘉禎元年（一二三三）頃と指摘した¹。これに対して、本間洋一氏は、元久元年（一二〇四）頃から建暦元年（一二一一）頃と考察した²。本書の構成は、天象部、歳時部、地儀部のような中国の類書に倣った部立からなる巻と略韻や一字抄を収める巻からなる。各部立は、前半部に一字の見出し語（たとえば、天、日、月等）を、後半部に二字の見出し語（双貫語という。たとえば日月、月露等）を収める。そして、見出し語毎に関連する対語が集成されている。また、対語の一部には典拠となる注文が付されている。

『擲金抄』（存巻中下、巻中の一部闕）もまた、『文鳳抄』と同様の構成をもつ対句語彙集である。『文鳳抄』と大きく異なる点は二つある。一点目は、『文鳳抄』では、同一部立内にある非双貫語と双貫語とを別立にし、新たに双貫語を設けている点である。二点目は、対句を形成しない例句のみを収める絶句部を設けている点である。佐藤道生氏は、所収句等の整理を通じて、撰者は南家の儒者・藤原孝範（一一五八～一二三三）であり、成立時期は孝範が大内記の職にあった建永から承元（一二〇六～一二一〇）頃と考察する³。

このように、二書の撰者や成立時期等の整理は、詳しく行われてきた。その際、二書は、作詩の為の指南書と位置づけられる。しかし、具体的な利用方法や成立後の利用状況については、あまり述べられていない。そこで、次節以下では、

二書が成立した鎌倉期の詩懐紙から対句語彙集利用について検討したい。更に、成立後の利用の可能性についても言及したいと考える。

三、句題詩の構成方法

これらの対句語彙集を検討する前提として、句題詩の構成方法を説明する。句題詩とは、漢字五文字の詩題（句題）をもつ詩のことである。句題には、古句の一句を用いることが多かったが、時代が下るにつれ題者の案出する新題が増えていった。句題詩は、当時の一般的な詩体に倣い、大半が七言律詩で作られた。七言律詩であれば、押韻、平仄、領聯・頸聯を対句にするという近体詩の規則を守れば良いが、平安中期以後の句題詩には、本邦独自に形成された規則が存在した。⁴

首聯（一句目・二句目）では、詩題に用いられている漢字五文字を全て用いて題意を表現する。この聯を「題目」と呼ぶ。なお、詩題の五文字をこの聯以外に用いてはならない。

領聯（三句目・四句目）と頸聯（五句目・六句目）では、句題の五文字を用いずに題意を敷衍する。これを「破題」と呼ぶ。句題は、実字（名詞）と虚字（名詞以外の品詞）から構成される。領聯・頸聯では、少なくとも実字を別の語に言い換えなければならない。更に、どちらか一方の聯では、故事を用いて題意を表現することが望ましく、この場合は「破題」ではなく「本文」と呼ぶ。また、句題は、双貫語という並列構造をもつ二字の熟語（山水、河海等）を含む場合がある。原則として破題は、句毎に完結させなければならないが、双貫語の場合、一句中に全てを詠み込むことが

困難である。そこで、双貫語を上句と下句に分け、破題するという方法をとる。たとえば、詩題が「山水」を含む場合、上句で「山」を言い換えたならば、下句で「水」を言い換える必要がある。

尾聯（七句目・八句目）に至り、はじめて詩の作者は自身の心情を自由に表現することが許される。これを「述懐」と呼ぶ。内容としては、詩宴の主催者や詩宴の場、出席者を賞賛する一方、自身の不遇な状況を嘆く等の自謙の句が見られることが多い。

次に、『文鳳抄』や『擲金抄』が作られた鎌倉期の詩においても、こうした句題詩の構成方法が守られていたことを確認しておきたい。取り上げるのは、『猪隈関白日記紙背詩懷紙』所収、菅原在茂の句題詩である。これは、建久七年（一一九六）から元久元年（一二〇四）頃に近衛家実（一一七九～一二四三）が主催した詩宴にて提出された詩懷紙のことで、二書とほぼ同時期に成立している。

冬日同賦雪飛數澤中各分一字應教詩（探得形字）

大學頭在茂

- 1 雪、飛、四面望旁冷 雪四面に飛びて望旁く冷じ
- 2 數澤、之中在意銘 數沢の中意に在りて銘す
- 3 雲夢高低天惣白 雲夢 高低 天惣て白し
- 4 孟諸遠近地無青 孟諸 遠近 地青きところ無し
- 5 言談入月晉人思 言談し月に入る 晉人の思
- 6 顛額吟花楚客形 顛額し花を吟ず 楚客の形

7 唯怪老頭雖作鶴 唯だ怪しむ老頭鶴作りと雖も

8 多年尙未達卑聽 多年尙ほ未だ卑聽に達せざることを

詩題の「雪飛藪澤中（雪は藪沢の中に飛ぶ）」は、古句に典拠をもたない新題である。この詩題には、双貫語「藪澤」が含まれている。首聯では、傍点を付したように詩題の五文字が全て用いられている。

頷聯上句「雲夢」は、楚の藪の名である為、「藪」を言い換えている。対偶関係にある「孟諸」は、宋の大澤の名である為、「澤」を言い換えている。上句「天惣白」は、雪によって空が見渡す限り真つ白である様子を表す。それと対をなす「地無青」では地面が雪に覆われ草が全く見えない様子を表す。いずれも「雪飛」を言い換えている。したがって、頷聯は、上句で「雪飛藪中」を、下句で「雪飛澤中」を表し、一聯全体で詩題を破題している。

頸聯上句「言談・晉人思」は、晋の裴頠がその博識から「言談の林藪」と呼ばれた故事を典拠とし、「藪」を言い換えている。それと対をなす「顛顚」・「楚客形」は、楚から追放された屈原が澤畔にてさまよいながら、歌を吟じた故事を典拠とし、「澤」を言い換えている。上句と下句の双方で、故事を用いて詩題が言い換えられており、本文が為ざれていると言える。また、「入月」と「吟花」は、詩題の「雪飛」を表現していると考えられる。雪を月や花に喩える用例は、詩歌によく見られる表現である。したがって頸聯もまた、上句で「雪飛藪中」を、下句で「雪飛澤中」を表し、一聯全体で句題を破題している。

尾聯上句「作鶴」は、老いて頭髮が鶴のように白くなったことをいう。この表現は、『和漢朗詠集』卷上「雪」に「立於庭上頭為鶴、坐在爐辺手不龜（庭上に立てれば頭鶴為り、坐して爐辺に在れば手龜まらず）」という用例がある。下句「卑聽」は、臣下の言葉が天子に聞き届けられることを意味する（『毛詩』小雅「鶴鳴」）。尾聯にて在茂は、年老い、

頭髮が真っ白になっても臣下である自身の声が上に聞き届けられず、出世しないことを嘆いている。ここまで、当時の作詩においても句題詩の構成方法が守られていたことを確認出来た。

四、対句語彙集の利用方法

前節で見た句題詩の構成方法を念頭に置き、『文鳳抄』の利用方法を検討したい。まず、『文鳳抄』(巻一、天象部)「雪」の項(見出し語)に見られる対語の一部を掲出する。

雪

月、花、練、粉、紘、光、色、寒、冷、冴、封、鑲、白、飛、積、埋、凝、點、皆以一字有雪意。

寒輝、清輝、素輝。寒色、冷色。輕質、寒光。素光、皓色。

袁戸、袁門、袁扉。

漢時大雪。洛陽令出安行。民家皆除雪出。袁安門無行路。安已死、令人除雪。入戸見、安偃臥。問云、何不出。安云、大雪人皆餓、不宜干人。賢拳之。録異傳

月光冷、花色輕。落粧散、柳絮飛。

玉塵、鉛粉、銀粉、素練。銀丸。

『文鳳抄』に立てられている見出し語は、全て実字であり、詩題を構成する実字に一致する。実字は、句題詩の頷聯・頸聯において別の語に言い換えなければならない。

見出し語「雪」の下に列挙される語句を見ると、一字の列挙の後に「皆以一字有雪意。(皆一字を以て雪意有り。)」と見える。つまり、雪を別の一字で比喩的に言い換えた語の後に二字、三字で言い換えた語が続いていることがわかる。全て、雪と表現されているが、そこに雪の文字は見られない。これは、領聯・頸聯にて破題する為に用いる語彙を集成したものであるからに他ならない。この点を「雪」という字を詩題に含む実例で確認しよう。掲出する詩は、『猪隈閑白記紙背詩懷紙』所収、平親輔の作品である。

冬日同賦雪中催宴遊一首〈以情爲韻〉

親輔

- 1 雪中遠近眺望程 雪中遠近眺望する程
- 2 遊宴頻催感興并 遊宴して頻りに催す感興并せたり
- 3 花色冬寒梁苑思 花色冬寒し梁苑の思
- 4 月光曉**五**楚臺情 月光曉に**五**えたり楚臺の情
- 5 管絃窗下玉塵散 管絃窓下玉塵散る
- 6 詩酒座間銀粉輕 詩酒座間銀粉輕し
- 7 才拙性疎愚昧□ 才拙く性疎かにして愚昧の□
- 8 好文亭席獨慙名 文を好む亭席独り名を慙ぢたり

※□は裁断の為不明。

この詩は、「雪中催宴遊(雪中に宴遊を催す)」という句題詩である。領聯では、「花色」が空を舞う雪を花に喩え、そ

れと対をなす「月光」が雪の輝きを月明かりに喩えることで、それぞれ「雪」を言い換えている。頸聯では、「玉塵」が雪を玉のように輝く塵に喩え、「銀粉」が雪を銀の粉に喩えることで、「雪」を言い換えている。

ここで、『文鳳抄』の「雪」の見出し語以下の部分と当該詩とを比較、検討しよう。すると、傍線を引いた領聯の「花色」と「月光」、頸聯の「玉塵」と「銀粉」について、両者が一致することを指摘出来る。したがって、『文鳳抄』の語彙と当該詩の語句とが同じ意味で用いられていることがわかる。

この一致から、句題詩を構成する際の本書の利用方法を考えたい。当該詩のように詩題に「雪」を含む場合には「雪」の項目から、「宴遊」を表現する為には「宴遊」の項目から、語句を選び、対句を構成すれば良いのである。その際、注の付く語句を用いた場合には、故事を踏まえた事になり、本文を行った事になる。こうした対句語彙集を用いれば、作者は、詩題の実字に関する対語を知らずとも、対句を構成出来、容易に句題詩を作ることが出来たと考える。つまり、『文鳳抄』や『擲金抄』の構成は、句題詩で、領聯・頸聯の破題の為に対句を構成する際、非常に有効であったと言える。また、親輔詩と『文鳳抄』の語句には一致する点が多い。『文鳳抄』は、本詩懐紙よりも後に成立している為、親輔が本書を利用したとは言えない。ただ、こうした一致が確認出来たことは、親輔が『文鳳抄』のような対句語彙集を利用したことを示唆しているのではないだろうか。

続いて、『文鳳抄』や『擲金抄』等が成立した鎌倉期における対句語彙集利用の可能性を検討したい。検討の対象は、『猪隈閑白記紙背詩懐紙』所収詩である。

前節にて、菅原在茂の「雪飛藪澤中」という句題詩を見た。これと同じ詩題をもつ大江周房、平親輔の詩がある。

大江周房詩の頸聯には、「悉鋪白沙雲夢地、剩翻銀粉孟諸程（悉く白沙を鋪く雲夢の地、剩へ銀粉を翻す孟諸の程）。」

とある。在茂詩と同様、「雲夢」「孟諸」の対句が、双貫語「藪澤」を言い換える為に用いられている。また、平親輔詩の頷聯には、「花飄不復言談處、月亘旁明遊獵程（花飄りて復しからず言談の処、月亘えて旁く明らかなり遊獵の程）」とある。この詩では、「言談」が先にも見た裴頠の故事を用いて「藪」を言い換えており、在茂詩と一致する。

このように、複数の詩に詩題を言い換える対語が共通する例は、本詩懐紙の作品中に散見される。

まず、「惜春山路間（春を惜しむ山路の間）」詩群を見る。この詩群の作者には、源家俊、大江匡範、菅原在高、近衛兼基、平知基、平親輔がいる。源家俊詩の頷聯に、「古蹤花殘樵客思、□棲鶯老隱倫情（古跡花残る樵客の思、□棲鶯老ゆ隱倫の情）」とある。下三字「樵客思」は、「樵客」が山に住むきこりを表し、「隱倫情」は、「隱倫」が世間から離れ、山などに隱遁する人物を表す。つまり、「樵客思」と「隱倫情」という対偶関係は、「山路」を言い換える。これは、平親輔詩の頷聯にも「恨半日傾樵客思、勞□霞散隱倫情（半を恨み日傾く樵客の思、□を勞ひ霞散る隱倫の情）」と見出せる。「樵客」と「隱倫」という対偶関係は、『本朝無題詩』¹⁰（巻一、山家春雪）の藤原茂明詩にも「樵客没蹤尋始至、隱倫寄望聚將看（樵客跡を没し尋ねて始めて至り、隱倫望を寄せ聚まりて將に看んとす）」と見出せる。しかし、三字の対偶関係が全く同じであるものは、当該の二紙だけである。

続いて、「蟬響滿東西（蟬響東西に滿つ）」詩群を見よう。詩題には、「東西」という双貫語が含まれている。詩の作者には、平時宗、平時兼、敦□¹¹がいる。平時宗詩の頷聯は、「新月光前聞更冷、斜陽影下耳相驚（新月光前に聞きて更に冷じ、斜陽影下に耳相驚く）」とある。これは、「新月」が東に出たばかりの月を意味し、「東」を言い換えている。対となる「斜陽」は、傾きかかった太陽の意で「西」を言い換えている。この対偶関係は、同じ詩宴で詠まれた平時兼詩の頷聯にも「斜陽傾處調琴曲、新月昇時擊磬聲（斜陽傾く処琴を調ふ曲、新月昇る時磬を撃つ声）」と見出せる。

このように、同じ詩題をもつ詩の間で対語が共通することは、参加者の間に共通する対句語彙集の存在を示唆していると考えられる。特に双貫語を言い換える対偶関係が一致している例を見出したことは、その考えを補強するものとなるだろう。本資料が詩懐紙である点から、二書との関わりを述べるのは、困難である。ただ、二書に先行する対句語彙集が詩宴の出席者の間で共有されており、二書の撰者もそれを目にしてきた可能性は、指摘出来るだろう。

五、『近衛兼教一筆五部大乘経紙背詩懐紙』について

前節では、『文鳳抄』や『擲金抄』と同時期に成立した『猪隈関白記紙背詩懐紙』所収詩を考察した。本節では、時代を少し下げ、二書を利用した可能性の高い『近衛兼教一筆五部大乘経紙背詩懐紙』を用いて、その実態を検討したい。

『近衛兼教一筆五部大乘経紙背詩懐紙』は、近衛兼教（一二六七～一三三六）が高山寺に奉納した『五部大乘経』の紙背文書である。その成立時期は、弘安から永仁（一二八〇年代～一二九〇年代）頃と推定される。これは、兼教が主催する詩宴にて提出された詩懐紙で、後に反故となり、その紙背が料紙として用いられている。詩懐紙は現存するものが少ない為、鎌倉期の形式や詩の内容を知る上で、非常に貴重な資料だといえよう。元来、高山寺に納められていたが、後にその一部が寺外に流出してしまった。その散佚後の状況や、そこに名前の見える作者については是澤恭三氏によって整理されている。¹² また、堀川貴司氏は、本詩懐紙の形式を整理され、「猪隈関白記紙背詩懐紙」とほぼ同様の場における三～四世代後の様子が窺える資料」と述べる。¹³ 東京大学史料編纂所は、幸田成友氏が本詩懐紙をまとまって所蔵していた時に書写されたものを「鎌倉末名家詩懐紙」として所蔵している。

本詩懐紙は、料紙として用いられる際、天地左右が裁断された為、出席者の名前や詩の内容が完全にわかるものはない。名前を確認出来る作者には、近衛兼教、源顕資、平仲親、平親基等が挙げられる。彼らは『猪隈関白記紙背詩懐紙』に作者として名前が見える人物の子孫であり、近衛家と非常に繋がりが深い人々である。堀川氏が指摘するように、本詩懐紙の作品が作られた状況は『猪隈関白記紙背詩懐紙』に類似するといえよう。これまで、その存在について触れられてはきたものの、懐紙の詩の内容について考察されてはこなかった。そこで次節以下では、詩の内容の考察を通して、『文鳳抄』、『擲金抄』を含む対句語彙集の利用について考えていきたい。

六、『文鳳抄』、『擲金抄』利用の可能性

『近衛兼教一筆五部大乘経紙背詩懐紙』には、「右近衛権中将」、「右近衛中将」という官職名と花押のみ記された懐紙が散見される。まず「右近衛権中将」と記す人物の作品を掲出する。

秋夜同賦入夜有虫聲詩（以便爲韻）

右近衛権中将「花押」

1 □ 従露霑唯入夜 □ 従ひ露霑ふ唯だ夜に入る

2 草 □ 唧々有虫聲 草 □ 唧々として虫声有り

3 鳧鐘未報破夢處 鳧鐘未だ報ぜず夢を破る処

4 虬漏頻移滿耳程 虬漏頻りに移る耳に満つる程

5 野外怨深敬枕思 野外怨み深し枕を敲つる思

6 叢端韻急舉燈情 叢端韻急なり燈を拳ぐる情

7 不堪自本催時興 堪へず本より時興を催し

8 此□眺望□□□□ 此□眺望□□□□

※□は裁断の為不明

「入夜有虫聲（夜に入りて虫声有り）」という詩題をもつ句題詩である。この詩題は、藤原忠通の別集である『法性寺殿御集』に見られる。詩題の典拠はなく、忠通が詩を作った際に、新題として案出されたものであろう。当該詩の場合、先祖である忠通が用いた詩題を子孫の兼教が流用したものと考ええる。

当該詩は、句題詩である為、頷聯・頸聯では詩題を破題する必要がある。ここでは、頸聯に注目したい。上句では、「野外怨深」が、外で虫が秋の終わりを怨んで鳴いていることを意味し、詩題の「有虫聲」を言い換える。「敬枕思」は、夜になり枕を傾け、虫の声に聞き耳を立てることを意味し、「入夜」を言い換える。下句では、「叢端韻急」が、叢で鳴く虫の音がせわしいことを意味し、「有虫聲」を言い換える。また、「舉燈情」は、夜になり燈をつけることを意味し、「入夜」を言い換えている。これにより、各句で詩題が破題されていることがわかる。

この内、詩題の「虫聲」を言い換える「野外怨深」・「叢端韻急」という対偶関係は、『文鳳抄』（巻九、鳥獸部）の「虫」の項目に「叢端韻急、野外怨深」とあるのと一致する。他に用例は見えず、当該詩の作者は、この部分を参考にして詩を作ったと考ええる。『文鳳抄』の影響を指摘出来る詩は他にも見られる。次に、右近衛中将の詩を掲出する。

三月三日同賦酌酒對桃花一首 〈以粧爲韻〉

右近衛中将「花押」

1 □菜遍對桃花艷 □菜遍く桃花の艶に對ふ

2 酌酒□朝勤感腸 酒を酌む□朝勤めて腸に感ず

3 蓮子幾廻□□艷 蓮子は幾廻りぞ□□の艶

4 荆南餘味万年□ 荆南の余味万年の□

5 霞光旁染玉山下 霞光は旁た染む玉山の下

6 火□無銷藍水傍 火□は消ゆること無し藍水の傍

7 一詠一吟詩席興 一詠一吟詩席の興

8 此中与友□□□ 此の中に友と□□□ ※□は裁断の為不明

本詩懷紙は、三月三日の詩宴にて作られている。「酌酒對桃花（酒を酌みて桃花に對ふ）」という詩題は、先に取り上げた『猪隈関白記紙背詩懷紙』に見える。『猪隈関白記』¹⁵「正治元年（一一二〇）三月三日条に、「有作文。題云、酌酒對桃花、以春爲韻。在茂朝臣獻之。（作文有り。題に云ふ、酒を酌みて桃花に對ふ、春を以て韻とす。在茂朝臣、之を献ず。）とあり、詩宴に関する記録が残されている。詩題の典拠はなく、在茂が新題として案出したものであろう。当該詩は、同じ三月三日の詩宴の題として、先祖の家実の詩宴での詩題を流用したと考える。

頷聯の「蓮子幾廻」「荆南餘味」という対偶関係に注目したい。上句「蓮子」は、『白氏文集』（1330、郡樓夜宴留客）の「艷聽竹枝曲、香傳蓮子盃（艶は竹枝曲に聴き、香は蓮子盃を伝ふ）。」を典拠とし、盃を意味し、詩題の「酌酒」を言い換えている。下句「荆南」は、非常においしい酒で有名な地の名前で、「酌酒」を言い換えている。「酌酒」を言い換える対偶関係は、『文鳳抄』（卷六、飲食部）の「酒」の項に「蓮子幾廻、荆南餘味。蓮子ハ盃名ナリ。」とあるのと一

致する。また、『擲金抄』（巻中、飲食部）の「酒」の項目にも「蓮子幾廻、荊南餘味」とあり、一致する。全く同じ対偶関係をもつ用例は、他になく、二書に列挙された対語とのみ一致することは見逃せない。したがって、詩の作者が、二書を参考に詩を作ったのではないかと指摘しておきたい。

ここで、『文鳳抄』と同様の対句語彙集である『擲金抄』を典拠とする可能性が出てきた。その可能性から、同じ作者の次の作品を検討したい。

冬日同賦雪深樵隱家詩（題中取韻）

右近衛中將「花押」

1 樵隱家□多感事 樵隱の家□感ずる事多し

2 安露□□雪方深 安露□□雪方に深し

3 九冬花陰負薪思 九冬花陰薪を負ふ思

4 千里月前練策□ 千里月前策を練る□

5 溪北嵐□寒雨地 溪北嵐□寒雨の地

6 □陽日暮白雲□ □陽日暮る白雲の□

7 □□□□□□□□ □□□□□□□□ ※□は裁断の為不明

頸聯上句「溪北」と対偶関係にある「□陽」の欠字について、その推定を試みたい。この詩は、「雪深樵隱家（雪深し樵隱の家）」という詩題をもつ句題詩である。この詩題に含まれる「樵隱」は、双貫語である為、頷聯・頸聯において上句と下句に分けて詠む必要がある。上句「溪北」は、後漢の鄭弘が若耶溪できこりをしていた時、そこで、出会った仙

人に風が北に吹くよう頼んだ故事を踏まえ、「樵」を言い換える。これにより、対をなす下句では、「隠」を言い換える必要がある。『擲金抄』（巻下、人倫部）には、「樵隱」の項目があり、「溪北嵐、淮陽雲、渭陽浪」と対語が列挙されている。利用の状況と文字の残存部分から欠字部分には、「淮」が該当すると推定される。この語句が「淮陽」であるならば、これは漢の應曜が淮陽山中に隠遁したまま出仕しなかった故事を踏まえていると考えられ、「隠」を言い換えていることになる。双貫語を対句として表現出来ており、作者は、故事を踏まえながら、この部分を参考にしていたのではないかと考える。

ここまで、『近衛兼教一筆五部大乘経紙背詩懷紙』所収詩を例にとり、その内容を考察した。詩題には、かつて忠通家実の詩宴で作られたものが流用されており、忠通等の影響が窺える。また、詩の対偶関係から『文鳳抄』や『擲金抄』を実際に利用していることを指摘出来た。これまで、あまり述べられてこなかった二書の利用の姿を詩の実作において見出したことは、二書の流行を窺わせる。また、その利用の指摘は、本詩懷紙の欠字部分の推定を可能にし、詩懷紙作品全体を把握する為の重要な手がかりになるだろう。

七、終わりに

平安中期に確立された句題詩の構成方法は、鎌倉期においても守られており、依然として詩作の主流であった。このことは、鎌倉期に成立した対句語彙集『文鳳抄』・『擲金抄』の利用方法と深く関わる。二書の見出し語は、句題詩の詩題の実字と一致し、その下に列挙された対語は、いずれも実字を言い換える為の語句である。詩の作者は、主として韻

聯・頸聯における破題を行う為に二書を利用していたと考えられる。

二書と同時期に成立した『猪隈閑白記紙背詩懷紙』所収詩には、同じ詩題を持つ句題詩の間で、対語の一致が散見される。この点から、当時、対句語彙集が利用されていた可能性を指摘出来た。また破題に用いられている対語の中には『文鳳抄』と一致するものも見られる。両者の成立時期から、『文鳳抄』や『擲金抄』に先行する対句語彙集が存在し、詩懷紙の作者や二書の撰者は、それを利用していたと考ええる。

そして、『近衛兼教一筆五部大乘経紙背詩懷紙』所収詩の考察を通して、先祖である忠通、家実の詩宴の影響と共に、『文鳳抄』や『擲金抄』が実際に利用されていた姿を窺えた。このことは、二書が当時流行していたことの証と言えよう。但し、こうした対句語彙集利用の例は、取り上げた二つの詩懷紙群作品の一部に留まる。二つの詩懷紙群には、破題の際に、詩題を言い換えるという方法を用いていない詩も見られる。この点から、二書は、破題の基本である語句の言い換えを学ぶ為の書であったと言える。今後は、取り上げた詩懷紙群について考察を進め、二書の利用の状況を明らかにしていきたい。また、先祖である忠通の詩壇、家実の詩壇と『近衛兼教一筆五部大乘経紙背詩懷紙』との関わりについても明らかにしていきたいと考える。

山崎誠「菅大府卿為長伝小考」(『中世学問史の基底と展開』和泉書院、一九九三年、初出一九七九年七月)。

本間洋一「『文鳳抄』の編纂素材について」(『王朝漢文学表現論考』和泉書院、二〇〇二年、初出一九八八年七月)。

佐藤道生「『擲金抄』解題」(『平安後期日本漢文学の研究』笠間書院、二〇〇三年、初出一九九二年)。

句題詩の構成方法については、主として佐藤道生「句題詩概説」(『句題詩研究 古代日本の文学に見られる心と言葉』佐藤道生編、慶應義塾大学21世紀COE心の統合的研究センター、二〇〇七年)、同「漢詩文・漢文学」(『日本文学史 古代・

中世編』小峯和明編、ミネルヴァ書房、二〇一三年)や堀川貴司「句題詩の詠法と場」(『詩のかたち・詩のこころ――

中世日本漢文学研究』若草書房、二〇〇六年、初出一九九五年五月)を参照。

本文は大曾根章介・後藤昭雄・山崎誠・佐藤道生「陽明文庫蔵猪隈関白日記紙背詩懷紙」(『和漢比較文学叢書5 中世文学と漢文学I』汲古書院、一九八七年)参照。山崎誠氏は「陽明文庫蔵猪隈関白日記紙背詩懷紙について」において、本

詩懷紙の成立時期や作者について整理されている。(前掲註1書、初出一九八二年六月)。

以下に語句の典拠を挙げる。○雲夢(文選卷十九、高唐賦、宋玉)昔者楚襄王、與宋玉游於雲夢之臺。「李善注」漢書音

義張揖曰、雲夢楚數也。在南郡華容縣、其中有臺館也。○孟諸(文選卷七、子虛賦、司馬相如)且齊東階鉅海、南有琅邪。(中

略)浮渤澥、游孟諸。「李善注」文穎曰宋大澤也。故屬齊。○言談・晉人思(晉書卷三十五、裴頠傳)時人謂頠為言談之

林藪。○月(百二十詠、雪)地疑明月夜、山似白雲朝。○顛顛・楚客形(文選卷三十三、漁父、屈原)屈原既放、遊於

江潭、行吟澤畔。顏色憔悴、形容枯槁。○花(白氏文集、076、答馬侍御見贈)苑花似雪同隨筆、宮月如眉伴直廬。なお、

本文右横の小字は、詩句と詩題との対応関係を稿者が考え示したものである。

『和漢朗詠集』所収の詩句に関しては、佐藤道生・柳澤良一『和漢朗詠集／新撰朗詠集』(和歌文学大系47、明治書院、二

〇二年)の本文、作品番号、訓読、注釈を参照。

以下、川口久雄『真福寺本 文鳳抄』(勉誠社、一九八一年)の影印に拠る。また適宜、本間洋一校注『歌論歌学集成

別巻二 文鳳抄』(三弥井書店、二〇〇一年)を参照。

以下、□は不明箇所。本作品は詩懷紙に書かれており、後に料紙とされた為、欠損し判読出来ない箇所が存在する。

『本朝無題詩』所収の詩句に関しては、本間洋一『本朝無題詩全注釈』(新典社、一九九二〜一九九四年)の本文、訓読、

14 13 12 11

注釈を参照。

裁断されており、作者名は不明。

11 是澤恭三「紙背文書の散佚 高山寺藏近衛兼教一筆大乘教の例」(『古文書研究』第九号、一九七五年十二月)。

12 堀川貴司「詩懷紙通観」(前掲注4書、初出二〇〇三年二月)。

13 『大日本古記録 猪隈関白記一』(岩波書店、一九七二年)参照。

【附記】ご所蔵資料の引用を許して下さいました陽明文庫に厚く御礼申し上げます。